
星を身籠るエトワール にこめ

星好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星を身籠るエトワール にこめ

【Nコード】

N4021W

【作者名】

星好き

【あらすじ】

主人公・一夜はある少女と出会う。

人の作り出したネットワークの中に生まれた新しい生命体。

彼女に触れた瞬間、それは新種と親である人間の初めての接触となり、世界は彼女の為の

ゆりかご世界を用意した。

一夜と彼女は時間をかけながらもそこと元の世界との通路をつくり出した。

ただし時間がかかりすぎた。

一夜は天才の領域に達し、様々な発明をし、ゆりかご世界を新しいネットワークワールドにし、更に新種と同化し新しい人種となる手段まで獲得していた。

一夜は仲間を集め、会社を作り、世界を動かす。

その一夜にある少女が接触してきた。

それは別の新種。花から生まれた精霊と人間とを合わせて作られた生命体。

彼女は世界に迫る危機のために更なる開花を求めている。
危機とは二つ。

一つは異世界で人間を原因とする地球崩壊を起こしてしまった組織。ゆえに人間壊滅を狙う組織。

一つは宇宙のどこかで別の知的生命体のネットワークの中に生まれた生命体。

彼らは宇宙そのものを進化させるためあらゆる物体を分解し、吸収し、その方法を自ら編み出そうとしていた。

そしてその対象に地球が選ばれたのだった。

途中異世界人の襲撃があったものの、一夜達の手助けもあって、精霊は見事に開花。

一夜は異世界人と精霊のトップをつれてもう一つのネットワーク生命体に会いに行く。

そして知る。

勝てない。

敵が地球に来るまでにはまだ時間がある。

一夜達は誓う。

強くなると。

pixivにも投稿中です。

自己紹介

星継主要メンバーの自己紹介代わりエピソード

一

良い満月だ。

その満月を見上げるのは、ふざけた道化の仮装をした男。

「一夜！」

その男を見上げるのは綺麗なスーツに身を包んだ若い女性。

更にその下には数台のパトカーと警官が陣取っている。

一夜はざっと周囲を見回し、自身の居る高層ビルの屋上から少し位置が下になる隣のビルの屋上に居る女性に視線を移す。

「ベリエ」

「降りなさい一夜！と言うか返しなさい！」

「そんなに唯一の相手が俺なのが嫌か」

「誰がそちらの話をしましたか！と言うか返しようが無いでしょうそちらは！」

顔を真っ赤にしながら反論する。無意識の内に両腕が微妙に胸を隠そうとしているのに気付いて慌ててその手に持った一夜製の銃を構え直しつつ、

「盗んだ『結晶』を返しなさいと言っているのです！」

ある美術館からの帰り道、未だ顔の火照りが直らない様子の彼女を見て、一夜の胸にはほんのりと昔の恋心が蘇る。

——一夜。

——あ、いや思い出したただけだって。

耳元から響く咲麗の声に頭の中で言い訳をする。

「一夜！」

「返せないよ。」

気に入らないなら追って来い。捕まらんけど」

「なん——」

道化の正体を知っているのは『敵』の中では彼女だけだ。だが彼女は一夜の事を他所には漏らさない。解っているのだ。彼が罪を暴こうとしているという事が。一方で自分の正義も曲げられない。そういう女だ。

二

「うはあ……ういっはあ……」

目を輝かせながら妙な奇声を上げるのは十代後半と思われる白人の少女。大小の浮き輪とビニールで作ったかの様な服を着る彼女の目に映るのは、ペンギン。しかしそのペンギンは卵の様に丸々で、大きさはイチゴ程度からスイカ大までいる。それぞれがフルーツをテーマにした帽子を被り、針金で作ったかの様な片翼を持って空を飛んでいる。

視線を動かすと白い毬藻の様な生物が隊列を組んで川辺まで行き、風船の様に膨らんで次々水面に飛び込んでいく。と思ったら水流に流されながら小さな足でチパチパと水をかきながら対岸を目指し始めた。彼らにとっては大冒険だろう。

「……………はっ!」

我に帰った少女は服の袖についている浮き輪を操作しビニール服の腕の部分にディスプレイを表示させた。

あれやこれやと操作し、

「AIだ……思考タイプ……なんで?なんで?なんで?分解していいの?するよ?超したい」

そういう彼女の手には別の浮き輪から取り出した工具が既に握られていた。

彼女がこの不思議な世界に来たのはつい数分前だ。学校で自分より知力で劣る先生の授業に退屈を覚え夢の世界にトリップしようかと考え出した時だ。黒板が『扉』に変わった。

どこに続いているかもわからないメルヘンな扉に『求めよ、さらば与えられん。一名限定』の文字が浮かび上がった時、彼女は迷わず

扉を開いて飛び込んだ。

周囲はまだざわついている。別の所から来たのだろう、ざっと千人はいそうだ。左右にある馬鹿でかい扉は何だ、向こうに見える城は何だと騒いでいる。

一夜が興味を持ったのは、それらを無視してロボットばかりに興味を示す少女だった。

三

「戻った……よな？よし……よし！」

かの世界からの帰還、その直後の話。

随分経ったな……こっちでは三分か……家に帰る前に記憶の整理を……いやそれより暫く感慨に……折角ファンファーレもなってるんだし……ファンファーレ？

止まらない胸のドキワクを抑えようとしてもしないで巡らせていた思考に落ち着きが戻る。

その理由は、気持ちに呼応するかの様に鳴り響くトランペットの音色だった。

気付けば音は止まっている。キリの良い所まで終わった様だった。

——一夜一夜、あちら。

顔を向けてみれば、きつい目つきと目が合った。

「君は……宙に浮いてる俺を見て驚くより睨むんだ？」

中学の終わりから高校の始めくらいの年齢だろうか。その少女はトランペットを抱く様に持ったまま相も変わらず一夜を睨んでいる。

「……練習……音大きいから時間も場所も限られるの……驚くのは後でしてあげるから静かにして」

「す、すみません……」

楽器とは対照的な小さな小さな声。風鈴でも鳴っているかの様な声。に、妙に圧倒されてしまった。

地に下りて再び鳴り始める荘厳な音に暫く耳を傾けてみる。巧いな。エコー・クレフに協力してもらおうかな。神側で。

エコー・クレフとは一夜が作り続けているゲームの名だ。神様達が曲を作り詞をつけた。すると、その曲調と詞の内容に合わせた世界が曲の数だけ生まれた。利用者は一つのキャラでその全ての世界を往来可能で、神の演奏会の日にはイベントをクリアした者だけにそれに参加出来る。

その演奏に、彼女の音が欲しい。

四

「出なくて良い？」

英国の地下牢獄にて。

牢獄といってもここは普通の部屋と変わらない。むしろ豪奢だ。

ここに王族失格の烙印を押された元王女が居る。

「私は何人も殺しました。人の血以上に美しいと感じるものが無い。ですから……」

手弱女。故に男は女を護る。それに異存は無い。しかし……

「そうして護られてきたわけか。衝動と生きる努力もしないで」

「——！治せるなら！」

「治す？無理だろ。俺にも美意識はある。けどその対象は俺の意思では決まらない」

「……なら……どうすればよかったと……」

「生きればよかったんだよ」

「そんな事出来——」

——咲麗、ちょっと怒るなよ。

——はい、一夜。

一夜は日本刀を出現させると、迷わず王女の服を切り裂き肌をあらわにした。

「——！？」

肌を隠そうとする王女の腕を無理に広げベットに押し倒し、言う。「君は綺麗だ。自分を利用すれば幾らでも男を籠絡出来た。幾らでも血を差し出す男を作れた。幾らでも自分を護れた。」

でもしなかった」

「そんな恥知らずな——」

「ほら、生きる気がないんだ」

「ちが——」

「覚悟が無かった」

「私に——体を売れと……」

「だが状況は変わった。俺が来た。俺なら君の望む血と殺人の世界を用意してやれる」

体を起こして王女に手を差し出す。

「が、覚悟の無い人間にやるものは無い。

君は、君の全てを使って俺を籠絡しろ。俺から奪い取れ。俺を利用して、生きろ」

五と六

人が居るとは思わなかった。夜に。裸で。

道とすら呼べない厳しいアクセス条件、小さな入江。周囲は林。

今日は月は無く、周囲の林に群生している蛍が一斉に飛び立つ様子が见れるはずだ。

星と蛍の共演を見に来たのだが……

一夜の視線の先には女性が居る。十代後半だろう。背が高く長い足に細い腰に日本人にしては大きな胸。太ももまで届く長いストリート黒髪。桜色の唇。細い眉。凛々しい瞳。

夜空と、海水とが泳ぐ彼女の体を装飾する。

綺麗だ……全てが……

それにしても先程ばっちり目が合ったはずだ。全く意識されないのはどうだろう……

ラッパ少女といい興味の対象外か俺は？

その時、ようやく我に返ったらしい耳元の咲麗が声を上げた。

「ちよっと！見ては駄目一夜！」

「ちよっ、声出すなっ、お前今ヘッドホン状態——」

「忘れろ——っ！」

「って!?!は!?!土っ星! (掛け声)」

「え?嘘?わあ!?!」

言葉の終了と共に高校生程のビキニ少女が砂浜に頭から突っ込んだ。

一夜に突然襲い掛かってきた膝蹴りを彼は見事にキャッチし後ろに放り投げたのだ。

おー刺さってる刺さってる。

「ぶはっ、何すんの覗き野郎!変質者!スケベエロタコ!」

「おうそこまで言われるといっすすがすがしい、とかならないからな?そして最後の状況に関係な——お前どこかで……」

その少女の顔には見覚えがあった。

金のポニーテール。紫の瞳。

そう確か、新体操の……

花恋・リーリエ。

あらゆる大会でトップを取り続ける天才少女。

だが……カメラの前では常に品良く、その名の如く、可憐に花の咲く如く優しげにあえかに微笑む図書委員系少女だったはずだ。

「詐欺レベル!」

「女はみーちゃん以外こんなもんよ」

——失礼な!私は違います!

頭の中で咲麗が訴える。

「と言うかみーって?」

「あっちで泳いでる私の恋人。見るな!」

「うお!」

一夜の耳のそばを鋭い槍が抜ける。

あっち、と言われたから顔を向けようとしたのだが、肘が飛んできたのだった。

ついでに彼女が肩にかけていたタオルで目隠しをされる。

そう言えば同性愛宣言してたなこの子……

——一夜一夜、ひよっとしたらこの二人、第四種になれるかも。

——マジで……スカウトし辛……

「みーちゃんちゃんと水着着て！」

海の方から砂を踏む音がする。

みーちゃんとやらが海から上がったようだ。

「大丈夫よ。彼は私を美術品として観ているから」

合っている。一夜は性的な感情では見ていなかった。

「えっと……みーさん？」

「海初」
みそめ

「あ、駄目みーちゃん耳が腐る」

腐らねーよ。

それにしても、水泳美女、声まで完璧か。

わずかに発せられただけだったがその声音は澄み、その発声は強さを持っていた。

「……貴方、飛んできたでしょう？　そういう不思議な事他にも出来るの？」

「……出来る」

「そう……」

確かめたい事と泳ぎたい場所があるの」

未知の領域で。

そう感じた一夜は、驚き、不敵に笑った。

七

「こら、なぜお前が居るのだ」

「お前のテスターリストを盗み見て先に入ったからだ一夜」

『悪魔』を相手に汗を流す男が一人。

ここエコー・クレフではそれぞれの曲世界に扉が二つある。一つは開くプレイヤーの位置で別の曲世界に常時繋がる扉。もう一つは週に一度の神々の演奏会の時にだけ開放される神城への扉。だが中にはイベントがあり、クリアしたプレイヤーしか演奏会に参加出来

ない。ミスをすれば地獄エリアへ。そこでしか入手出来ないアイテムや魔法もあるが悪魔が強力な上に脱出イベントが難解。好んで来る場所ではない。にも関わらず、

「肉体レベルと成長レベルも自然世界のまま、特訓の為に悪魔を使うか。いくらこっちで鍛えても『不自然な肉体変化』は出る時には元に戻るぞ？やりすぎじゃないか？」

「お前も零号から出るまでの間に似た様な事やってたんだろ」

「俺のは体力低下防止とその後の事を考えてだ。お前はがむしゃらなだけだろ」

悪魔の振るう鎌をかわし、敵の咽喉を銃で打ち抜き男が言う。

「……悪いか」

「悪いな。」

「……後悔か？」

「わからねえ……。国が消えたのはしょうがねえ。ソ連回帰をしたロシアが悪い。が、家族を目の前で死なせたのは、しょうがねえじやすまねえ。」

あん時力があればとか、この先思いたくねえんだ」

「それを後悔ってんだよ阿呆。」

「……俺が鍛えてやろうか？」

「あ？」

「地下の連中を制圧し利用する為にこちらが操作可能の組織を送り込む。お前そこのトップになれ」

八

『世の行く末について、危惧はある』

難病を持つ高齢者用に改良された住宅の一室にて、その老いた政治家は言った。

『だが私はご覧の通りもう体を満足に動かす事も叶わない』

彼の筋肉の下には人工神経が存在する。そして、頭にはヘッドホン型のヘッドマウントディスプレイ。後に出すバイナリーに早く馴

染んでもらおうと先んじて一夜が世に出した物だ。バンド部分がクリアガラスディスプレイになっている。ディスプレイ越しに見ればヘッドホンにそれぞれが選んだスキンが付いた物もある事だろう。当時既に世にあったHMDを発展させファクションアイテム化した物だが、これには視覚・聴覚障害者の為にカメラが映す物・音をリアルタイムで脳に送信する機能と言語障害者の為に思考をデジタル音声にして発信する機能がある。

「若さをあげようか？磨羯翁」

『……何？』

「先程話したメリー達、彼らと同化する事の出来る人物を探している。

正確にはメリーとのコネクターを構築出来る人物。

そして同化の結果、第四人種と成れる人物」

『第……四？』

「人間は最早自然進化を待つ必要は無い。待ちたい人間も居るだろうが生憎そこに私は居ない。

私は既存三種に属していない」

『……君は幾つだ？』

「貴方より上だ。

完全同化を解いても第四種の性質は幾らか保たれる。この領域ではね、『勝利』を増やす事が出来るのだよ」

『勝利とは？』

「ここから先は有料だ。

翁、政の頂点にもう一度立ってくれ」

九

「いいですよ、喜んでお手伝いさせていただきます」

わぁ爽やか過ぎて何かむかつくう。

——一夜……

耳より少し長めのサラサラの金の髪、長い睫毛、緩やかにカーブ

する薄い眉、ブルーの猫目、小さな鼻、艶々なピンクの唇、幼さの残る顔の輪郭と体つき、色白の肌。

優しく微笑むのは世紀の美——少年。

「一夜様の神秘性があれば僕と貴方が協力しても文句は出ないでしょう」

一夜と少年を包むのはシーレン教会。少年、即ちシーレンの名を付けられた教会だ。

齢十六にして讃えられる彼は、『キリストの転生体』と呼ばれる。「俺は神様の存在は信じてないよ？」

「構いませんよ。僕は世界に絆と思慕と安寧を与えられるのであれば同一の神を信じる必要は無いと考えます。周りの者は僕を信じていますから僕が貴方を信じろと言えば問題無し♪」

キリストの持っていたとされる四種の奇跡、それをこの少年は持っている。

——本当だと思いますか？一夜。

——超能力を再現する事は可能だ。それを考えれば自然が科学を再現する事も……いやあ難しいかなあ。

一夜は説教棚の向こうに高く掲げられている銀の大十字架を見上げる。正確には、十字架の中央にある硝子の棺とその中身を。

そもそもこの少年の出現はタイミングが良すぎた。一夜がキリストの骸骨をローマに提供してから数ヵ月後の出現。

ひよっとして……やりやがったか？

「いやあそれにしても良かった。僕も一夜様には用があつたので」「うん？」

「噂になってるんですよ。貴方が黙示録の獣じゃないかって」

十

「君いつもここにいるね。有名人の奇行は目立つよ？」

「え？あ、はいすみません？」

「いや謝らなくてもいい。何で？」

巨大な巨大な時計の中央、一夜の前には小さな少年。歳は涙月や雫月より少し上といった所だと思うが小柄で女の子の様な顔立ちのせいで随分幼く見える。

ここはかつての日本に広がっていた都市を集め改良して作られた巨大な円形時計都市。巨大な、浮遊都市。外縁は列島を覆うほど広く、器用に光を反射して列島全てに太陽光が行き届くようになっている。

どこぞの道化が先進国を様々な形の浮遊都市に変え跡地に苗木達の種だのをばら撒いてもうすぐ一ヶ月。下には遺跡・漁と観光施設くらいしかない。

「あの、道化さんに見つけてもらえるかと」

「……ふむ？」

最近では『道化』と言うと皆共通のイメージを持つ様になっている。つまり一夜である。

少年は少し渋った後、じっと見つめる一夜の視線に耐えかねたように一気に喋りだした。

「僕……宇宙人に会いたいんです！」

……オウ……

「幼稚園の頃秘密基地にしていた壊れた神社の階段から落ちそうになったんですけど、その時助けに来てくれたんです！こう、クラゲみたいな体で、でも人みたいで、手と足の先にはヒラヒラが付いてて、触覚みたいなのがあって、暫く遊んでたんです！と言うか心配されてたって言うか……あ、話はしなかったんですけど。口無かったです。それでこれ！」

少年が胸元を見せる。そこには、小さなクリスタルが埋まっていた。

「花冠作ってあげたらこれくれて……」

それは、地球の物では無かった。

「その後他の人達に呼ばれたっぽくて、そのまま……それで道化さんならって！」

……何これ黒ダルマ？

——コッ、コラ一夜！失礼ですよ！

彼らの前にいるのは黒ダルマ、では無く、嘘みたい丸く、嘘み
たいな巨体を持つ黒人だ。筋肉ではない。贅肉である。

天蠍翁も着けているヘッドホンディスプレイに最も多くスピーカ
ースキンを投稿している人物であり、最もDLされている人物であ
る。

しかしプログラムは彼の本職ではない。

彼の仕事は、

「こっちの方が……」

野太い声で呟きながら彼は一夜に似合う帽子を探し続け被せたり
取ったりを繰り返している。

彼の仕事は、服飾デザイナーである。

靴だけ、シャツだけ、アクセだけ、ではなくファッション全体に
渡って大きな手で器用に仕事をこなす彼の事はファッションアイテ
ムに拘る人で無くとも知っている事だろう。

「あのさ、さっきの話——」

「はいはい聞いていましたよ。」

建築物、製品等に既存デザインに囚われない美しいデザインを、
あるいは狂おしいデザインを、と言う事ですネ。

自分のセンスを表現出来るのであれば喜んでそのステージ、お借
りしましょう。

「ただし——」

「ん？」

「一人で仕事はしません。」

私を越えたい、もしくは私など何とも思っていない、その様な人
物を集めていただきたい。

そして最良無くデザインを選んで下さい」

「いいよ」

「それとこれ絶対です」

「うん」

「デザイナーを目指す子達のお勉強の場と活動の場、起業支援とかしてあげて下さい」

十二

「一夜一夜、こちらも」

「えーまだ見るの」

季節の流れる不思議な黒引き振袖に身を包む咲麗に手を引かれ、一夜達は次の美術品の前に行く。

既に美術館は閉館時刻を過ぎている。

残っていた人間もセキュリティも全て眠らせた為に二人を阻む者はもういない。

「ねえ一夜、これは何て言うの？」

咲麗はよく一夜の名前を口にする。

咲麗は答えが目の前にあっても一夜に聞いてくる。

それは、彼女の一番好きな言葉が『一夜』で、一番好きな音が、彼の声だからだ。

「まあ、本当に綺麗……」

今日の目的を前に、咲麗はほんのりと頬を染めていた。

それは、一見するとただの硝子のカード。

変わっている事と言えば中央に誰かの名前が輝いている事だけだ。

それは――

「これが……人工靈魂か……」

人工靈魂――つまり人為的に転生を作ろうという目的は手法は違えども基本的に同じ考えの下で研究されている。

『人の境界を思考力・記憶を保存したまま壊し、凝縮し、別の肉体あるいは機械のボディに主体としてセットする』

その第一号がこのカードなわけだが、それは公表されていない。

唯の美術品の一つ。人工靈魂の研究そのものが認められていないからだ。

更に、適性があるというだけで選出され、本人が拒否をしていたともなれば。

「一夜、この子の体はどうする御積り？」

「超美人さんのボディを作ってそれに」

「お・と・こ・の・こですが」

「あ、はいすみません……」

「そこまです一夜！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4021w/>

星を身籠るエトワール にこめ

2011年9月4日03時31分発行